

エリシヤとエリコ

2006. 12. 5 (火)
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

マルコの福音書 10章46節から52節

彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めた。そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。すると、イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。」と言った。すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」すると、盲人は言った。「先生。目が見えるようになることです。」するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。

近江八幡の喜びの集いでのことを少し報告します。イエス様は本当に素晴らしいお方ですから。

二、三ヶ月前から、近江八幡の T 兄から頼まれていたことがあります。「今度の喜びの集い（11月の近江八幡）の前に、どうしてもある病院まで行っていただきたいのです。導かれた二人の男がいますので。二人とも近江八幡の喜びの集いで、どうしても洗礼を受けたい」と。しかし、二人とも受けられなくなってしまいました。一人は、喜びの集いの何日か前に天に召されたのです。ですから、ホテルでは葬儀ができませんので、記念会をしましょう。名前だけ変えたら同じものになりますから、ということになりました。「蛇のように賢くなりなさい」… (笑)

そして、その記念会をもつようになりました。召された H 兄弟は六十八歳でした。それだけではなく、奥さんは目が不自由ですし、二人の息子も目が不自由なのです。二十三年間も寝たきりで、入院していたのです。二十三週間というだけでもかわいそうですのに。二十三年間。奥さんは名古屋の喜びの集いの時、洗礼を受けられました。家族の人たちは、「母ちゃんの信仰は本物だ」と認めざるを得なかったと思います。

T 兄は、彼 (Hさん) の入院していた病院に行って、イエス様のことを紹介しました。彼は素直に信じるようになりました。隣のベッドにいた男は、怖い顔つきの男でした。(やくざです。) このやくざの父親は彼が五歳の時に亡くなり、母親は水商売をして云々…。彼は愛を経験したことがないまま、十八歳になった時にやくざになったのです。(何と何をしたのか、T 兄も聞く勇気がありませんでした。) 自分の奥さんと子どもももちろん捨てて

しまい、ほかの男の奥さんを奪ったらしい。メチャクチャでした。何回も刑務所に入っていたのです。

T兄は、Hさんのために病院に行きましたが、隣のベッドにいるそのやくざは聞く耳を持っていました。そして導かれました。「俺は必ず地獄だと思っていた。けれど、救われる可能性があればありがたい」と。本当に素直に信じたのです。今回、洗礼を受けたかったのですが、医者、「駄目です。あなたがどうしてもこの病院から出たければ、退院した後再び入院できるかどうか分かりませんよ」と。彼は、首を長くして、今度の大阪・神戸の喜びの集いで洗礼を受けたいと言うのです。もちろん洗礼はいつでも良いのですが、やはりイエス様は本当に素晴らしいお方です。助けを求めれば、必ず救ってくださいます。

先程読みました箇所（マルコの福音書10：46～52）を見ても、イエス様のほうからお聞きになったのです。「何をほしいのか?」。彼は、「新しい車」と言わなかった。（笑）「いい別荘があれば…」とも言わず、当たり前のことを言ったのです。「先生。見えることです!」。そして、彼は見えるようになったのです。

今日は、エリシャとエリコについて、いっしょに考えてみたいと思います。

このエリコという町は、のろわれた町でした。盲人の彼は、希望なし、喜びなし、平安なしの将来に向かうはずでした。けれど、イエス様はお聞きになったのです。「何がほしいのか?」。彼は、「あわれんでください」としか言えなかったのです。

第二列王記の2章を読んでみましょう。エリコについての箇所です。

列王記・第二 2章19節から22節

この町の人々がエリシャに言った。「あなたさまもご覧のとおり、この町は住むのには良いのですが、水が悪く、この土地は流産が多いのです。」すると、エリシャは言った。「新しい皿に塩を盛って、私のところに持って来なさい。」人々は彼のところにそれを持って来た。エリシャは水の源のところに行って、塩をそこに投げ込んで言った。「主はこう仰せられる。『わたしはこの水をいやした。ここからは、もう、死も流産も起こらない。』」こうして、水は良くなり、今日に至っている。エリシャが言ったことばのとおりである。

先日、私たちはこのエリシャのとった態度について考えました。後戻りする恐れのある後ろの橋を全部断ち切り、信仰と忍耐をもって上からの力を待ち望みつつ、死の川ヨルダン川を渡る用意をして、主にすべてを、また自分自身も、明け渡したことについて考えました。これは、エリシャの奉仕の生活の源をなすものだったのです。もし、私たちが主に仕えたいと思うなら、やはり私たちにもほかの道は無いのではないのでしょうか。私たちはこの道を歩む用意をしているのでしょうか。

まず、エリコについて考えたいと思います。「エリコ」とは、いったい何を意味しているのでしょうか。そのあとで、エリシャについてちょっと考えたいと思います。

エリコとは何を意味しているかと言いますと、「エリコ」は、イスラエルの民が約束された国カナンの地に入ろうとしたとき、最初に妨げとなった町でした。エリコとは、神の民の敵そのものだったのです。エリコの町の人たちは、主なる神によって選ばれた民であるイスラエルの人々を攻撃しました。それは、エリコの人たちの攻撃だけではなく、悪魔がイスラエルの民がカナンの地に入ることを妨げようとして攻撃したのです。こんにちの状態は逆です。「この約束された国に入っているイスラエル人を追い出そう。一人残らず殺そう」。そういう動きです。

主なる神は、「あなたがたにこの国を与えた」と言われました。悪魔は、この約束を不可能にしようと、あらゆる策略を試みたのです。悪魔は主に選ばれた民を攻撃するために、エリコの人たち、つまり人間を用いました。悪魔は主のご目的を妨げるために、肉と血をもつ人間を用います。エリコは、悪魔の全力を意味しています。「エリコ」は、人間の力をも意味しているのです。なぜなら、悪魔はいつも人間を通して働くからです。

エリコは、イスラエルの人々によって占領されました。悪魔の力は、神の民によってこぼたれ（打ち破られ）ました。

主なる神は、「わたしはあなたがたにエリコを与えた」と言われました。しかしエリコは、目に見えるエリコの王、すなわち敵に属するものでした。けれど、エリコは神の民のものでした。なぜなら主は、この地をあなたがたに与えるというよりも、もう与えた、と約束されたからです。

エリコの征服は、信仰の実践でした。信仰の実践には三つのことが必要です。

第一番目。主のことばである聖書。「主の約束」です。

第二番目。人間の持つべき信頼。「信仰」です。

第三番目。「信仰の実践」です。

主ははっきり言われました。すなわち「わたしはエリコを与えた」と。イスラエルの民は信仰によって、六日間エリコの町を回りました。七日目に七回目を回りました。これは信仰です。その七日目に町の城壁が崩れ、イスラエルの民はエリコを占領したのです。

なぜ、戦いの実践が必要だったのでしょうか。それは、信仰の実践が経験の事実となるためだったのです。戦いを通してのみ、自分のものにすることができるのです。

エペソ人への手紙に、「主の救いにあずかった者をもとによみがえらせ、ともに天の座に着かせてくださったのである」と書いてあります。

エペソ人への手紙 2章6節

キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

私たちの場合、このことばは確かなものなのでしょうか。私たちはイエス様との交わりを持っているのでしょうか。私たちは困難を克服しているのでしょうか。

同じエペソ人への手紙の中で、「戦い」について書かれています。よく知られている6章12節です。

エペソ人への手紙 6章12節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

「私たち」とは、「信じる者」です。「血肉」とは、「人間」です。

私たちはこの力に対する戦いによってだけ、主イエス様の満ち満ちたところにまで至るのです。このことをよく考えましょう。

悪魔は人間の肉を用います。イエス様は悪魔の力を滅ぼすために、同じ肉の形をとられたのです。イエス様の十字架は、肉によって働きかけるあらゆる敵の力に対する勝利です。これとまったく同じように、エリコは、肉によって働きかけるあらゆる敵の力に対する勝利を意味します。

「エリコ」とは、すなわち主なる神に逆らう町でした。エリコは人間の力をもってしてはあまりにも強過ぎました。遣わされた人たちは、エリコを征服することは絶対に不可能だと言いました。その町々は大きく、石垣が天に達していました。遣わされた人たちの判断は正しかったのです。「これは肉と血だけではなく、その後ろに悪魔の力があるから絶対に駄目だ。何をやっても成功しない」と、十人の遣わされた人たちは判断しました。

ローマ書7章を読むと、それは血と肉に対する戦いだけではなく、悪魔に対する戦いであることが分かります。戦いの終わりは、みな悲痛な叫びで終わっています。

ローマ人への手紙 7章24節

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

ローマ書7章は、肉に対する戦いでの勝利は、絶対不可能だという叫び声です。

ローマ人への手紙 7章23節前半

私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、…

ローマ人への手紙 7章19節

私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

肉は受け身ではありません。罪と死の法則によって駆り立てます。その裏には、悪魔の支配があります。エリコは人間にとっては強過ぎました。エリコの占領は、肉を通して働く悪魔のあらゆる力に打ち勝ったイエス様の「十字架の勝利」を表わしています。

七という数字は、完全な勝利を表わしています。主は、イスラエルの民にエリコの町の周りを毎日一回、六日間回るように命令されました。そして、七日目には七回回るように

命じられました。七は、いつも完全を意味しています。主なる神はそれによってエリコの占領が完全であることを言っておられます。エリコは完全に征服されたのです。

イエス様の「十字架の勝利」も完全でした。この主イエス様の勝利は、私たち一人一人のためです。

イスラエルの民の一人、アカンという男は、金の延べ棒と美しい外套を盗みました。金の延べ棒は、当時の貨幣でした。物の売買にこの金の延べ棒を用いました。この金の延べ棒は当時最も貴重なものだったようです。こんにちでも、お金はこの世の人たちにとって、最も大切なものになってしまっています。

エリコが占領される以前、主なる神は「エリコの金は、全部わたしのものである」と言われたのです。読んでみましょう。

ヨシュア記 6章18節、19節

「ただ、あなたがたは、聖絶のものに手を出すな。聖絶のものにしないため、聖絶のものを取って、イスラエルの宿営を聖絶のものにし、これにわざわいをもたらさないためである。ただし、銀、金、および青銅の器、鉄の器はすべて、主のために聖別されたものだから、主の宝物倉に持ち込まなければならない。」

けれどアカンという男は自分のためにそれを盗んだのです。これはいつも肉の方法です。肉はいつも自分に栄光を帰そうとします。

ヨシュア記 7章19節

そこで、ヨシュアはアカンに言った。「わが子よ。イスラエルの神、主に栄光を帰し、主に告白しなさい。あなたが何をしたのか私に告げなさい。私に隠してはいけない。」

肉は、いつも主に属する立場を自分のものにしようとしています。お金は全部主に属します。栄光は、全部主に属します。悪魔は、私たちが主に属するものを自分のものにさせようと、あらゆる策略を試みます。私たちを誘（いざな）います。

アカンは、バビロニアの外套を盗んだのです。この外套は外国のものです。すなわち、バビロンの偶像礼拝に関係がありました。この外套は、バビロニアの偶像に仕える祭司の外套であったかもしれません。このことを、主はのろわれました。

偶像礼拝は、この世の神の仕事、すなわち悪魔の仕事です。偶像礼拝は全部、本来主の占めるべき場所を侵そうとするものです。アカンはその外套を盗みました。主ののろわれた者と関係を結んだのです。

この罪に対する主の刑罰は、私たちに偶像礼拝に対する刑罰を教えてください。

ヨシュア記 7章24節、25節

ヨシュアは全イスラエルとともに、ゼラフの子アカンと、銀や、外套、金の延べ棒、および彼の息子、娘、牛、ろば、羊、天幕、それに、彼の所有物全部を取って、アコルの谷へ連れて行った。そこでヨシュアは言った。「なぜあなたは私たちにわざわいをもたらしたのか。主は、きょう、あなたにわざわいをもたらされる。」全イスラエ

ルは彼を石で打ち殺し、彼らのものを火で焼き、それらに石を投げつけた。

とあります。

エリコには偶像礼拝者がいました。エリコは、カナン全地の縮図でした。カナンでは、いたるところで偶像礼拝が行なわれました。アカンが刑罰を受けたと全く同じように、カナン全地の偶像礼拝も滅ぼされなければなりません。

使徒行伝の中に、主なる神がイスラエルの民より強いカナンの七つの民を追い出したと書き記されています。(使徒行伝 13 : 19) 七回、イスラエルの民はエリコの周りを回らなければならなかったのです。この七回は、七つの民をも意味しています。カナンの七つの民は、実質的にはエリコで完全に滅ぼされました。

エリコは、肉に対して働こうとする悪魔への「主の十字架の勝利」を表わしています。

ここで、私たちは一つの大切な真理を覚えるべきではないかと思うのです。すなわち、「十字架の力」の信仰は権威を意味しているのです。すべては「信仰」の問題です。町をぐるぐる回ったのは、「信仰の実践」でした。

毎日、同じ道を回りましたが、何も起こりませんでした。毎日同じでした。イスラエルの民は、目的に少しも近づかないように思えました。六日目も最初の日と同じように、何も起こらなかったのです。七日目も回りました。一回目、二回目、三回目、四回目、五回目、六回目、回りましたが何も起こりませんでした。七回目を回りました。しかし前と変わりがなかったのです。

それからイスラエルの民は、勝利の叫び声を挙げなければならなかったのです。(誰も、「それは馬鹿らしい。全部無駄なことだ」と言ったかもしれません。) けれどいっさいは、「信仰」の問題でした。イスラエルの民は、何も起こらず、何も見えなかったにもかかわらず、「勝利」、「万歳」と叫ばなければならなかったのです。それから、石垣が崩れ落ちたのです。この石垣とは考えられないほど強いものでした。

今朝、ちょっと読んだのです。いろいろな人たちは、エリコの崩れ落ちた石垣を掘り起こし、徹底的に崩れた原因を調べたのですが、何をやっても不明。たぶん地震だったのではないのでしょうか。主にとって不可能なことはありません。

最初は、エリコののろいと、アカンののろいについて考えました。

ヨシュアは、エリコをのろいました。エリコへののろいは、のろいが悪魔の働きによってもたらされていると言われていました。悪魔は、その働きを、人間を通して行ないます。これは要注意です。すなわち、人間のすることには主ののろいがある。なぜなら、人間の後ろには悪魔が働いているからです。

ヨシュアは、エリコをのろいました。のろいは二重の意味をもっています。すなわち、死と空虚とがあります。聖書は、肉体的な死についてだけではなくて、霊的な死についても語っています。

「エリコ」は、霊的な死とは何かを表わしている例です。霊的な死は、働くことができないとか、自分の力を用いることができないとかという意味ではありません。

エリコの人たちは働き、努力し、何日もの間畑で過ごし、収穫を得るために力いっぱい働きました。けれど、それらは一度に駄目になってしまいました。なぜなら、水が悪くなったからです。植物、果実は全部駄目になりました。これはのろいです。

のろいのもう一つの面は、空虚です。空虚は、霊的な死のしるしです。空虚は、働き、仕事、力を持っていますが、それらは完成に至らず、実を結ぶまでにも至りません。霊的な死は、空虚をもたらす虚無に至ります。決して実を結びません。人間の働きは、全部、空虚でとどまります。成功したように見えますが、本当の実は結びません。

何と多くの人たちが、イエス様の御名を使って働いていることでしょうか。何と忙しく、また、何と力を込めて働くことでしょうか。そして、私たちは、「それが実だ」と言いますが、数年のちになって、その実が残るのででしょうか。もちろんそれは主のためにしていることであり、善意からしていることですが、そこに人間の力があるならば、のろいがあります。

パウロは、「被造物が虚無に服した」と書いたのです。このように人間から出るものは、すべて主ののろいのもとにあります。信じる者であってもなくても、自分でする努力は、全部主ののろいのもとにあります。私たちはこのことを知らなければなりません。

エリコは、のろいのもとにあります。エリコは人間にとっては強過ぎました。あなたの生活にも、何か強過ぎて手に負えないことがあるのでしょうか。

ある人が私に言いました。自分は頼ることが大嫌いだと。もし今、最も素晴らしい王様が来たとしたら、その家来になることを恥としないでしょう。イエス様は主の主、王の王であります。頼りたくないという人々はみな、つまらないものに頼っているのではないのでしょうか。例えば、酒、たばこ、自分の力などに。

どうでしょうか。何か強過ぎて手に負えないことがあるのでしょうか。今度こそ、救われていない家族、親戚、友だちのために祈ろうと決心しても、なかなかうまくいきません。このことは、自分のためには強過ぎるということを経験しているのです。

エリコは、人間にはあまりにも強過ぎましたので、主は一つの逃れ道をお造りになったのです。すなわち、「十字架による逃れ道」をお造りになられたのです。

「十字架の勝利」は、「完全な勝利」です。あなたは、イエス様の勝利を信じていますが、「自分の生活のうちに、その勝利を認めることができない」と言われるかもしれません。それはのろいなのではないのでしょうか。

私たちは主に属する金や栄光を、アカンのように盗んだのでしょうか。偶像礼拝と関係をもっているのでしょうか。もしそうであるなら、悪魔が私たちの生活を支配し、私たちに打ち勝ち、私たちは、自分には強過ぎると叫ぶようになるでしょう。「私は何というみじめな人間なのだろうか」と。

エリコは人間にとっては強過ぎます。悪魔は私たちより強いのです。けれどイエス様は、十字架で完全な勝利を治められました。しかし、どうしたらその勝利を自分の生活のうち

に自分のものとすることができるのでしょうか。

先に述べましたように「十字架の力の信仰」は権威を意味している、と。主イエスは、「血潮はすべての罪を赦す」と約束してくださったのです。主の言われることは真実です。私たちはそれを感謝しようとは思いませんか。感謝すればこの事実は自分のうちの経験となります。

今日ここに来られた方々の中に、まだ救いの確信をもっていない方がおられるかもしれません。もしそうだとすれば、霊的に死んでいる状態にあります。

しかし、聖書は言っています。今日変わることができます。イエスはすでにすべての人間の罪を背負われました。イエスは、私たちのために救いの代価を払われたのです。悔い改めて、イエスの犠牲のために感謝しようではないでしょうか。

イエスは、あなたの生活に本当の内容を与えたいと願っておいでになられます。人間は誰でも心の平安を必要とします。人間は誰でも主なる神との交わりを持たなければなりません。そうしなければ、心の渇きは決して癒されません。

静かに自分の生活を考えてください。一人だけになれる場所を探し、イエス様に祈ってください。「イエス様。私は幸福ではありません。私には平安がありません。私のわがままを赦してください。私を自由にしてください。私のために死んでくださったことを感謝いたします。あなたの血潮がすべての過ちを洗い聖めることを感謝いたします。今日から、あなたについて行けることを感謝します」と。

けれど、イエス様を信じる多くの者は、次のように告白します。「私は冷たくもなく、熱くもない、まったく別の人間になりたい」と。

私たちは、「死の川」を渡る用意があるのでしょうか。自分の意志、計画、すべてを主にささげる用意があるのでしょうか。

エリコは、前に話しましたように、主なる神に逆らい、人間には強過ぎる偶像礼拝の町でした。この悪魔の要塞であるエリコは、「主のことばを信じる信仰」と、「主のことばに従う」ことによって、初めて占領されたのです。これがエリコであり、エリコの歴史でした。

前に読みました箇所です。

列王記・第二 2章19節

この町の人々がエリシャに言った。「あなたさまもご覧のとおり、この町は住むのには良いのですが、水が悪く、この土地は流産が多いのです。」

エリシャは、町の苦しみの中で立ちました。エリシャの生活は、私たちに何を示そうとしているのでしょうか。そのような環境でエリシャはどんな立場をとったのでしょうか。

エリシャの生活は、私たちに「よみがえりの力」を教えています。エリシャの生活を見ると、エリシャが死に直面した時、死のほうに逃げ出したことが分かります。

ですから最後に、エリシャについてちょっと考えたいと思います。三つの点について考えましょう。

第一番目。エリシャの生活の根はどこにあったのでしょうか。

第二番目。エリシャの力はどこにあったのでしょうか。

第三番目。エリシャは何によって権威を得たのでしょうか。

1. 第一の点、すなわちエリシャの生活の根はどこにあったのでしょうか。

エリシャの生活の根は、「ヨルダン川」にありました。エリシャの生活の奉仕の始まりは「ヨルダン川」にあったのです。エリヤが昇天してから、エリシャはヨルダン川を渡って帰って来ました。エリシャは、死の川「ヨルダン川」を渡って行きました。

エリシャの生活の初めは、「十字架」、すなわち、死でした。つまり、エリシャの生活の土台なるものは、「十字架」だったのです。

列王記・第二 2章14節

彼はエリヤの身から落ちた外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主は、どこにおられるのですか。」と言い、彼が再び水を打つと、水が両側に分かれたので、エリシャは渡った。

とあります。エリシャが、「死の川」を外套で打って、「エリヤの神、主は、どこにおられますか」と言うと、水が右と左に分かれて彼は川を渡りました。

私たちはここに死に対する勝利を見ることができます。なぜなら、エリシャは「死の川」を押し分けて渡りましたから。またここに、エリシャが自分の主人エリヤの力を手にしたことが分かります。それは「よみがえりの力」でした。エリシャはさらに、主人の「よみがえりの力」をもって、先へ進んで行ったのです。

エリシャの生活の根は、「ヨルダン川」にありました。エリシャの生活の土台は、「十字架の力」でした。

パウロについて考えると同じことが言えます。パウロの生活の根も、「十字架の力」でした。パウロにとっては、「十字架」が本当にすべてでした。ですから彼も、よみがえりの力を現わした主なる神のしもべだったのです。

2. 次に、エリシャの力はどこにあったのでしょうか。

エリシャの力は、「よみがえり」にあったのです。エリシャは、いつも問題の中におらず、問題の外か、上にいたのです。

「よみがえり」は、この世の外にいることを意味しています。「よみがえり」は、イエス様がこの世から離れておられたことを意味しています。主イエス様はこの世から離れておいでになりましたから、この世に対する力をお持ちになっていたのです。

私たちも、「イエス様のよみがえりの力」によって生活することを学ばなければならないのではないのでしょうか。もしそうすることができれば、私たちの周りの人たちも導かれるようになります。

「イエス様のよみがえり」こそ、エリシャにとっても、パウロにとっても、すべてでした。イエス様との「よみがえり」のいのちによる交わりは、私たちが囲む死に打ち勝つことを意味しているのです。もしその交わりをもつようになれば、私たちは死に支配されずに、主に出会うことができます。

私たちは「よみがえり」の力を持っているのでしょうか。もし私たちが「死の川」を渡る用意をしているならば、よみがえりの力を持つようになります。

実際の生活を、イエス様の足もとに置く用意のある兄弟姉妹がいるのでしょうか。東京という町は、死が支配しているのです。ですから私たちは、「いのち」すなわち、「よみがえりの力」が必要なのです。

3. エリシャは何によって権威を得たのでしょうか。

エリシャは油をそそがれたことにより権威を与えられました。彼は上からの霊を受けました。彼は特別な預言者でした。彼は、油そそがれたただ一人の預言者だったのです。

旧約聖書では、王様や祭司はいつも油そそがれました。預言者たちは決して油そそぎを受けなかったのです。エリシャだけが油そそぎを受けたのです。主はエリヤに、エリシャは「エリヤの後継者」として油そそがれるべきだ、と命令なされたのです。

エリシャは、なぜ油そそがれたのでしょうか。

それは、エリシャはエリヤの跡継ぎとなるべきだったからです。ほかの言葉を使えば、エリヤとエリシャは元来、体は二つですが、人格は一つだったのです。

新約聖書を読むと、イエス様はからだなる教会のかしらであり、このかしらに属する者はみなからだであることがはっきり分かります。そしてそれだけではなく、このかしらとからだは一つの同じ油そそぎの下にあるとあります。

救いにあずかった者は、主イエス様を宿す者です。それは、イエス様のみわざを油そそぎの力で推し進めるためです。

エリヤが昇天する時、エリシャの権威が現われました。エリシャは権威を「油そそぎ」によってもっていたのです。「油そそぎ」とは何を意味しているのでしょうか。主なる神ご自身がお与えになるものであり、また、油そそがれたところには、主の権威があることが分かります。

「ヨルダン川」と、「よみがえり」と、「油そそぎ」は、すでに救われた人たちのためにだけあります。

もし、私たちが主のものであれば、

- ・私たちの根は、「ヨルダン川」にあるのでしょうか。
- ・私たちの周りにある「死に対する力」は、どこにあるのでしょうか。
- ・私たちは、「主のよみがえりの力」を持っているのでしょうか。

・私たちは、「聖霊による権威」を持っているのでしょうか。

パウロは、この素晴らしい事実について、次のように書いたのです。最後に読みます。
ガラテヤ人への手紙 2章19節、20節

しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

もはや、私ではなく、「主」です。

了